

阿南工業高等専門学校				応用化学コース				開講年度		令和05年度（2023年度）					
学科到達目標															
【実務経験のある教員による授業科目一覧】															
科目区分		授業科目	科目番号	単位種別	単位数	学年別週当授業時数								担当教員	履修上の区分
						専1年				専2年					
						前		後		前		後			
						1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q		
AZ	必修	機器分析	5516Z01	学修単位	2	2								山田 洋平	
AZ	必修	有機合成化学	5516Z02	学修単位	2	2								杉山 雄樹	
AZ	選択	電子デバイス工学	5596E01	学修単位	2			2						長谷川 竜生	
AZ	選択	電気回路解析	5596E03	学修単位	2	2								中村 雄一	
AZ	選択	材料加工学	5596M03	学修単位	2	2								安田 武司	
AZ	選択	シミュレーション工学	5596M04	学修単位	2			2						松浦 史法	
AZ	選択	無機化学特論	5596Z04	学修単位	2	2								小西 智也	
専門	必修	応用化学実験	5517J01	学修単位	2					6				鄭 涛 杉山 雄樹 上田 康平	
専門	必修	有機合成化学	5517Z02	学修単位	2					2				杉山 雄樹	
専門	選択	複合材料学	5597C04	学修単位	2					2				堀井 克章	
専門	選択	環境生物工学	5597C06	学修単位	2					2				大田 直友	
専門	選択	電気情報数学	5597E02	学修単位	2					2				杉野 隆三郎	
専門	選択	半導体物性	5597E04	学修単位	2							2		長谷川 竜生	
専門	選択	電子計測工学	5597E05	学修単位	2							2		松本 高志	
専門	選択	信号処理工学	5597I03	学修単位	2					2				安野 恵実子	
専門	選択	材料強度学	5597M02	学修単位	2					2				奥本 良博	
専門	選択	無機化学特論	5597Z04	学修単位	2					2				小西 智也	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	機器分析
科目基礎情報						
科目番号	5516Z01			科目区分	AZ / 必修	
授業形態				単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1	
開設期	前期			週時間数	2	
教科書/教材	エキスパート応用化学テキストシリーズ 機器分析 大谷肇 編 講談社 (ISBN978-4-06-156807-5)					
担当教員	山田 洋平					
到達目標						
1.電磁波と物質との相互作用について説明できる。 2.講義で扱う分析機器の測定原理を説明できる。 3.測定試料や得たい情報に応じて、分析方法を議論したり、考案することができる。 4.自身の研究で使う機器の原理や得られる情報を、他者に説明できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1.電磁波と物質との相互作用について説明できる	電磁波の波長、振動数、エネルギーの関係式を正確に利用できる。波長に基づき電磁波の分類（可視光線、赤外線など）を正確にできる。電磁波と物質の相互作用について、（電子励起具体例をあげて3つ以上説明できる。		電磁波の波長、振動数、エネルギーの関係式を利用できる。波長に基づき電磁波の分類（可視光線、赤外線など）ができる。電磁波と物質の相互作用について、具体例をあげて2つは説明できる。		電磁波の波長、振動数、エネルギーの関係式を利用できる。波長に基づき電磁波の分類（可視光線、赤外線など）ができない。	
2.講義で扱う分析機器の測定原理を説明できる。	教科書で扱う各種分析機器の測定原理を6つ以上説明できる。各装置の特徴を理解し、使い分けに関する知見を有する。		教科書で扱う各種分析機器の測定原理を5つ程度説明できる。		教科書で扱う各種分析機器の測定原理を説明できない。	
3.測定試料や得たい情報に応じて、分析方法を議論したり、考案することができる。	前処理から測定までのプロセスをイメージしながら、試料や入手したい情報に応じた分析方法を提案できる。		試料や入手したい情報に応じた分析方法を提案できる。		前処理から測定までのプロセスをイメージできない。試料や入手したい情報と分析方法の関係性を把握できていない。	
4.自身の研究で使う機器の原理や得られる情報を、他者に説明できる。	自身の研究発表をパワーポイント等で実施する。研究に用いる分析機器、解析方法について説明できる。自身の専門外のテーマであっても、他者の研究を聞いて質問をすることができる。		自身の研究発表をパワーポイント等で実施する。研究に用いる分析機器、解析方法について説明できる。		自身の研究、研究に用いる分析機器、解析方法について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	分析化学は試料の成分や含有量を調べ、さらにそれらの化学状態や存在状態を解析する学問である。この分析化学において、機器分析は中心的な役割を担っており、物質の開発、品質管理、環境調査、医療などヒトのあらゆる活動において欠かせないものである。一般に分析機器はその原理に基づき、電磁波分析・電気分析・分離分析・その他（熱分析・質量分析）に分類される。まず、これらの分析機器がどのような原理や装置構成で成り立っているのかを学ぶ。また、これらの分析機器から得られる結果から、どのような情報が得られるかについて学んでいく。					
授業の進め方・方法	教科書と配布資料をベースに解説していく。教室に持ち込み可能な道具類については、積極的に活用し、演示ないし実測できる時間を設ける。本校の本科4年生向けに開講している「応用化学（機器分析の単元）」と一部内容が重複するが、本講義ではより積極的な学生参加を求める。最終講義では、学生自身の研究で用いている分析機器に注目しつつ、研究発表を行ってもらう。					
注意点						
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	機器分析序論・電磁波と物質の相互作用	機器分析の活躍する場、電磁波と物質の相互作用について説明することができる。		
		2週	電磁波と物質の相互作用、吸光光度法	測定原理、装置構成および得られるスペクトルについて説明できる。		
		3週	蛍光光度法	測定原理、装置構成について説明できる。		
		4週	原子吸光分析	測定原理、装置構成について説明できる。各種原子化法（フレイム原子化法、電気加熱原子化法など）の特徴や使い分けについて説明できる。		
		5週	誘導結合プラズマ発光分析と質量分析	測定原理、装置構成について説明できる。原子化源、励起源、イオン化源としてのICPの意義について説明できる。		
		6週	誘導結合プラズマ発光分析を用いた分析実験（準備編）	実験計画を立てる。試料調製をおこなう。		
		7週	誘導結合プラズマ発光分析を用いた分析実験（実行編）	ICP-AES測定を行う		
		8週	誘導結合プラズマ発光分析を用いた分析実験（データ処理編）	Excelを用いて、実験結果をまとめる		
	2ndQ	9週	赤外分光分析とラマン分光分析の基礎	赤外分光分析とラマン分光分析の測定原理、装置構成について説明できる。		
		10週	赤外分光分析のスペクトルを読む	IRスペクトルから情報を読み取る練習をする。		
		11週	X線分析の基礎	X線の発生原理を学ぶ		
		12週	XRD, XRF	XRD,XRFの測定原理を学ぶ		

		13週	電子顕微鏡	電子顕微鏡の構造について説明できるようになる		
		14週	まとめ（学生による発表）	これまで学んだ分析機器についての復習や、学生による装置解説を求める。		
		15週	まとめ（学生による発表）	これまで学んだ分析機器についての復習や、学生による装置解説を求める。		
		16週	期末試験			
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標						
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合						
		定期試験	発表・質疑	レポート	合計	
総合評価割合		50	20	30	100	
専門的能力		50	20	30	100	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	有機合成化学	
科目基礎情報							
科目番号		5516Z02		科目区分		AZ / 必修	
授業形態		授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科		応用化学コース		対象学年		専1	
開設期		前期		週時間数		2	
教科書/教材		ビギナーのための有機合成反応 新版 (三共出版)					
担当教員		杉山 雄樹					
到達目標							
本講義の到達目標は、有機合成化学の分野で使われる専門用語や知識を修得することのみが目標ではなく、それらを使って学術的、産業的あるいは社会的な意味で議論や会話ができるようになること、さらに、現状の理解と問題点について議論できる力を身につけることも目標である。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安	
到達目標1		電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が予測できる。		電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が7割程度予測できる。		電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が5割程度予測できる。	
到達目標2		反応機構に基づき、生成物が予測できる。		反応機構に基づき、生成物が7割程度予測できる。		反応機構に基づき、生成物が5割程度予測できる。	
到達目標3		目的化合物に対して、合成計画をたてることができる。		目的化合物に対して、7割程度合成計画をたてることができる。		目的化合物に対して、5割程度合成計画をたてることができる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		本科で学んだ有機化学を復習しながら、有機合成化学の基本的な考え方や手法を学修する。医薬品や材料などを合成するためには、多くの合成反応を組み合わせる必要がある。そのことから本講義では、立体効果、電子効果を重点的に置き、基礎的な合成反応から最新の合成反応まで学修し、実際にターゲット化合物に対して合理的な合成反応経路を組み立てられるように知識と問題解決へのデザイン能力を身につける。					
授業の進め方・方法		講義とディスカッション形式で行う。講義毎に課題を与え、その課題をもとにディスカッションを行う。					
注意点							
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	有機合成化学とは		有機反応の分類を説明出来る。		
		2週	有機合成反応の考え方 1		原子、分子軌道、共鳴、酸・塩基を説明出来る。		
		3週	有機合成反応の考え方 2		有機反応と電子効果(I効果)について説明出来る。		
		4週	有機合成反応の考え方 3		有機反応と電子効果(R効果)について説明出来る。		
		5週	有機合成反応の考え方 4		有機反応と立体効果について説明出来る。		
		6週	炭化水素の合成と反応 1		水素添加反応、Clemensen還元、Wolf-Kishner還元を説明出来る。		
		7週	炭化水素の合成と反応 2		Wittig反応、Diels-Alder反応を説明出来る。		
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	アルコールの合成と反応1		アルコールの多くの分子変換反応を説明出来る。		
		10週	アルコールの合成と反応2		アルコールの多くの分子変換反応を説明出来る。		
		11週	エーテルとエポキシドの合成と反応		エーテル、エポキシド類の合成法や、Williamsonエーテル合成、エポキシドの開環反応を説明出来る。		
		12週	カルボニル化合物の合成と反応 1		カルボニル化合物の合成法や、Grignard反応、Michael付加反応、Aldol反応を説明出来る。		
		13週	カルボニル化合物の合成と反応 2		Baeyer-Viliger酸化、マロン酸エステル合成を説明出来る。		
		14週	アミン及びその誘導体の合成と反応		Mannich反応、アミドのHofmann転位を説明出来る。		
		15週	芳香族化合物の合成と反応		置換基の配向性から芳香族類の合成戦略を立てることができる。		
		16週	期末試験返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	50	0	0	0	50	100	
基礎的能力	10	0	0	0	10	20	
専門的能力	40	0	0	0	40	80	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	電子デバイス工学	
科目基礎情報							
科目番号	5596E01			科目区分	AZ / 選択		
授業形態				単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	基礎から学ぶ半導体電子デバイス（森北出版）						
担当教員	長谷川 竜生						
到達目標							
1. 半導体のエネルギーバンド図を説明でき、キャリア密度に関する諸式を導出できる。 2. pn接合ダイオードの特性をエネルギーバンド図を用いて説明でき、動作に関わる諸量を求めることができる。 3. 金属と半導体の接合の特性をエネルギーバンド図を用いて説明でき、動作に関わる諸量を求めることができる。 4. トランジスタ、サイリスタの動作原理をエネルギーバンド図を用いて説明できる。 5. JFET、MOSFETの動作原理をエネルギーバンド図を用いて説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安(不可)		
到達目標1	半導体のエネルギーバンド図を説明でき、キャリア密度に関する諸式を導出できる。		半導体のエネルギーバンド図を説明でき、キャリア密度について説明できる。		半導体のエネルギーバンド図を説明できる。		
到達目標2	pn接合ダイオードの特性をエネルギーバンド図を用いて説明でき、動作に関わる諸量を求めることができる。		pn接合ダイオードの特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		pn接合ダイオードの特性を説明できる。		
到達目標3	金属と半導体の接合の特性をエネルギーバンド図を用いて説明でき、動作に関わる諸量を求めることができる。		金属と半導体の接合の特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		金属と半導体の接合の特性を説明できる。		
到達目標4	トランジスタ、サイリスタの動作原理をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		トランジスタ、サイリスタの動作原理を説明できる。		トランジスタ、サイリスタの基本特性を説明できる。		
到達目標5	JFET、MOSFETの動作原理をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		JFET、MOSFETの動作原理を説明できる。		JFET、MOSFETの基本特性を説明できる。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	半導体の基本的性質およびキャリア輸送についてエネルギーバンドモデルを用いて学習し、pn接合ダイオード、ショットキー接合ダイオード、バイポーラトランジスタ、サイリスタ、電界効果トランジスタなど、さまざまな電子デバイスの構造・特性・動作原理について理解することを目的とする。						
授業の進め方・方法	講義形式を中心に授業を進める。 【授業時間30時間＋自学自習時間60時間】						
注意点							
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	半導体の基礎		半導体の定義を説明できる。 孤立原子、結晶のエネルギー構造を説明できる。		
		2週	半導体の基礎		真性半導体、p型・n型の不純物半導体について説明できる。		
		3週	半導体中のキャリア密度		真性半導体のキャリア密度に関する諸式を導出できる。 真性、不純物半導体のキャリア密度の図を説明できる。		
		4週	半導体中のキャリア密度 半導体中のキャリア輸送現象		絶縁体、半導体、導体のエネルギーバンドを説明できる。 ドリフト電流と拡散電流を説明できる。		
		5週	pn接合ダイオード		pn接合ダイオードの特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		
		6週	pn接合ダイオード		pn接合ダイオードの特性に関する諸式をポアソン方程式より導出できる。		
		7週	pn接合ダイオード		pn接合ダイオードの電圧-電流特性の式を導出できる。		
		8週	【中間試験】				
	4thQ	9週	金属と半導体の接合による整流特性		金属と半導体の接合の特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		
		10週	金属と半導体の接合による整流特性		金属と半導体の接合の特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		
		11週	金属と半導体の接合による整流特性		pn接合ダイオードの特性に関する諸式をポアソン方程式より導出できる。		
		12週	バイポーラトランジスタ		バイポーラトランジスタの特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		
		13週	バイポーラトランジスタ		サイリスタの特性をエネルギーバンド図を用いて説明できる。		

		14週	接合型電界効果トランジスタ（JFET）		接合型FETの特性を構造図を用いて説明できる。		
		15週	MOS型電界効果トランジスタ（MOSFET）		MOS形FETの特性を構造図とエネルギーバンド図を用いて説明できる。		
		16週	【学年末試験、答案返却】				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	80	0	20	0	0	100	
基礎的能力	40	0	10	0	0	50	
専門的能力	40	0	10	0	0	50	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	電気回路解析	
科目基礎情報							
科目番号	5596E03			科目区分	AZ / 選択		
授業形態				単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材							
担当教員	中村 雄一						
到達目標							
1. 基本素子の特性・作用について説明できる。 2. 基本回路について回路方程式を導き、動的特性を説明できる。 3. LおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 4. システム方程式の概念を理解し、回路に対応するシステム方程式を表現できる。 5. システム方程式を解き、回路の動的特性を説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安(可)		
到達目標1	基本素子の特性・作用について、数式等を用いて詳細に説明できる。		基本素子の特性・作用についてその概要を式を用いて説明できる。		基本素子の特性・作用について説明できる。		
到達目標2	基本回路について回路方程式を系統的に導くことができる。また、それを解き、動的特性を説明できる。		基本回路について回路方程式を導くことができる。また、方程式を解く手順を説明できる。		簡単な回路について回路方程式を導くことができる。		
到達目標3	高階微分で表現される回路方程式を導くことができる。また、その解法を具体的に行える。		2階微分までで表現される回路方程式を導くことができる。また、その解法を説明できる。		1階微分で表現される回路方程式を導くことができる。また、その解法を説明できる。		
到達目標4	システム方程式の概念を理解し、様々の回路に対応するシステム方程式を表現できる。		システム方程式の概念を理解し、基本的な回路に対応するシステム方程式を表現できる。		システム方程式の概念を理解し、簡単な回路に対応するシステム方程式を表現できる。		
到達目標5	種々のシステム方程式を解き、回路の動的特性を詳細に説明できる。		基本的なシステム方程式を解き、回路の動的特性の概略を説明できる。		簡単なシステム方程式を解き、回路の動的特性の概略を説明できる。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	システム状態方程式を用いて、種々の構成の回路に対する過渡現象を解析する。複数の種類の解析法について学修し、それぞれの特徴や手法を理解することで、目的に応じて最適な方法を選択して解析できることを目標とする。						
授業の進め方・方法	電気回路の動的特性を解析する考え方および手法について学ぶ。 授業内容の理解のため、演習およびレポート課題等も実施する。						
注意点	本講義の内容は線形力学系の解析に共通的に応用できる手法である。 ここでの表記法および解析手順について習熟することで、より実践的なシステム解析に応用できる力を養成する。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容	週ごとの到達目標			
前期	1stQ	1週	1. 基本回路の動的特性 (1) 動的素子	基本回路について回路方程式を導き、動的特性を説明できる。 ・動的素子の個々の特性・作用について説明できる。			
		2週	1. 基本回路の動的特性 (2) 回路方程式	基本回路について回路方程式を導き、動的特性を説明できる。 ・基本回路に対する回路方程式を求められる。			
		3週	1. 基本回路の動的特性 (3) 動的特性	基本回路について回路方程式を導き、動的特性を説明できる。 ・基本回路の回路方程式を解き、動的特性について説明できる。			
		4週	1. 基本回路の動的特性 (3) 動的特性	基本回路について回路方程式を導き、動的特性を説明できる。 ・基本回路の回路方程式を解き、動的特性について説明できる。			
		5週	2. 動的解析法 (1) 常微分方程式とその解法	LおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・定係数常微分方程式について理解し、その解法の手順を説明できる。			
		6週	2. 動的解析法 (1) 常微分方程式とその解法	LおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・定係数常微分方程式について理解し、その解法の手順を説明できる。			
		7週	2. 動的解析法 (1) 常微分方程式とその解法	LおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・定係数常微分方程式について理解し、その解法の手順を説明できる。			
		8週	中間試験	中間試験までの授業内容の理解度を確認する。			
	2ndQ	9週	2. 動的解析法 (2) ラプラス変換による解法	LおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・ラプラス変換を適用し、常微分方程式を解くことができる。			

		10週	2. 動的解析法 (2) ラプラス変換による解法	しおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・ラプラス変換を適用し、常微分方程式を解くことができる。
		11週	2. 動的解析法 (3) 伝達関数	しおよびCを含む回路について回路方程式の導出・解法を説明できる。 ・伝達関数の概念を理解し、電気回路をブロック線図で表現できる。
		12週	3. システム方程式とその解法 (1) システム方程式	システム方程式の概念を理解し、それを具体的に導出し、解くことができる。 ・システム方程式の概念を理解し、与えられた回路に対して導出できる。
		13週	3. システム方程式とその解法 (1) システム方程式	システム方程式の概念を理解し、それを具体的に導出し、解くことができる。 ・システム方程式の概念を理解し、与えられた回路に対して導出できる。
		14週	3. システム方程式とその解法 (2) システム方程式の解法	システム方程式の概念を理解し、それを具体的に導出し、解くことができる。 ・導いたシステム方程式を具体的に導くことができる。
		15週	3. システム方程式とその解法 (2) システム方程式の解法	システム方程式の概念を理解し、それを具体的に導出し、解くことができる。 ・導いたシステム方程式を具体的に導くことができる。
		16週	期末試験 答案返却時間	授業内容の理解度を確認する。

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
----	----	------	-----------	-------	-----

評価割合

	定期試験	小テスト	レポート・課題	発表	その他	合計
総合評価割合	80	0	20	0	0	100
基礎的能力	30	0	5	0	0	35
専門的能力	40	0	10	0	0	50
分野横断的能力	10	0	5	0	0	15

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	材料加工学	
科目基礎情報							
科目番号	5596M03			科目区分	AZ / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	必要に応じ資料配布						
担当教員	安田 武司						
到達目標							
1.金属材料の各種加工法やそれらの特徴と関連性について理解し、説明できる。 2.セラミックスおよび樹脂・複合材料の各種成形法やそれらの特徴について理解し、説明できる。 3.熱処理および表面処理やそれら必要性和効果ついて理解し、説明できる。 4.各種接合法やそれらの特徴について理解し、説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベル	
到達目標1	金属材料の各種加工法やそれらの特徴と関連性について理解し、説明できる。			金属材料の各種加工法について理解し、説明できる。		金属材料の各種加工法について理解できている。	
到達目標2	セラミックスおよび樹脂・複合材料の各種成形法やそれらの特徴について理解し、説明できる。			セラミックスおよび樹脂・複合材料の各種成形法について理解し、説明できる。		セラミックスおよび樹脂・複合材料の各種成形法について理解できている。	
到達目標3	熱処理および表面処理やそれら必要性和効果ついて理解し、説明できる。			熱処理および表面処理について理解し、説明できる。		熱処理および表面処理の熱処理について理解できている。	
到達目標4	各種接合法やそれらの特徴について理解し、説明できる。			各種接合法について理解し、説明できる。		各種接合法について理解できている。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	工業製品に多く活用されている金属材料（特に鋼）や、セラミックス、樹脂等は、用途に合わせてさまざまな形状に加工されている。技術者・設計者としてものづくりに関わる際、適切な材料加工法を選択するためには、各種材料加工時の現象やその特徴を理解しておかなければならない。本講義では、金属材料やセラミックス、樹脂等の各種加工・成形法や、一部材料の熱処理、表面処理に関する基礎知識の修得に取り組む。						
授業の進め方・方法	原則として、授業は講義形式にて行う。本科目は学修単位科目のため、事前および事後学習としてレポートを出題する。 【授業時間30時間＋自学自習時間60時間】						
注意点							
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	材料の加工方法の全体像		本講義の概要と、材料の加工方法の全体像を説明できる。		
		2週	金属材料の加工法		金属材料の各種加工法について説明できる。		
		3週	金属材料の加工法		金属材料の各種加工法について説明できる。		
		4週	セラミックスの成形法		セラミックスの成形法について説明できる。		
		5週	樹脂・複合材料の成形法		樹脂・複合材料の成形法について説明できる。		
		6週	熱処理の基礎		鉄鋼材料の熱処理の基礎について説明できる。		
		7週	熱処理の基礎		鉄鋼材料の熱処理の基礎について説明できる。		
		8週	実際の熱処理		鉄鋼材料の実際の熱処理について説明できる。		
	2ndQ	9週	中間試験				
		10週	表面処理		各種表面処理法について説明できる。		
		11週	表面処理		各種表面処理法について説明できる。		
		12週	機械的接合		各種機械的接合法について説明できる。		
		13週	接着		接着について説明できる。		
		14週	液相接合と固相接合		液相接合と固相接合の各種方法について説明できる。		
		15週	液相接合と固相接合		液相接合と固相接合の各種方法について説明できる。		
		16週	期末試験および答案返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	80	0	20	0	0	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	
専門的能力	60	0	20	0	0	80	
分野横断的能力	20	0	0	0	0	20	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	シミュレーション工学	
科目基礎情報							
科目番号	5596M04			科目区分	AZ / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	Pythonによる数値計算とシミュレーション（オーム社）						
担当教員	松浦 史法						
到達目標							
1. 3次元CADによるモデリングと線形応力解析，流体解析，伝熱解析を行うことができる。 2. 常微分方程式に基づく質点のシミュレーションを行うプログラムを作成できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベル	
到達目標1		解析精度を考慮して要素分割し，線形応力解析，流体解析及び伝熱解析ができる。		複雑な部品の3D-CADのモデリングと線形応力解析，流体解析及び伝熱解析ができる。		単純な部品の3D-CADのモデリングと線形応力解析，流体解析及び伝熱解析ができる。	
到達目標2		ポテンシャルに基づく2次元運動シミュレーションができる。		質点の1次元運動シミュレーションができる。		数値計算と誤差について説明できる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	有限要素法などの数値解析は、機械設計のための強力なツールとなる。本講義では、3次元CADに連動した解析ソフトを利用して応力解析、伝熱解析、流体解析を行う。数値計算力学の基本を習得し、質点の運動シミュレーションコードを作成する。						
授業の進め方・方法	前半は、3次元CADソフトウェアを用いた解析によりシミュレーションでどのようなことができるかを学ぶ。後半は、数値計算を行うプログラムを作成する。プログラム例はPython 3で提示されるが、各自得意な言語で実装してよい。この科目は学修単位科目のため、事前・事後学習としてレポート提出を課します。【授業時間31時間＋自学自習時間60時間】						
注意点	3次元CADソフトウェアの操作方法及びプログラミング言語に習熟していることが望ましい。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	モデル作成と質量特性		部材をモデリングし、材料を適用し、質量特性などを調べられる。		
		2週	応力解析		線形応力解析ができる。		
		3週	伝熱解析		部材の温度分布を計算できる。		
		4週	伝熱解析		部材の温度分布を計算できる。		
		5週	流体解析		管の内部を流れる流体の速度、圧力分布を計算できる。		
		6週	流体解析		管の内部を流れる流体の速度、圧力分布を計算できる。		
		7週	中間試験		SolidWorksを用いた実技試験		
		8週	数値計算の基本		数値計算により平方根計算ができる。		
	4thQ	9週	数値計算の基本		数値計算と誤差について説明できる。		
		10週	常微分方程式に基づく物理シミュレーション		オイラー法により自由落下のシミュレーションコードが作成できる。		
		11週	常微分方程式に基づく物理シミュレーション		オイラー法により着陸船のシミュレーションコードが作成できる。		
		12週	常微分方程式に基づく物理シミュレーション		ポテンシャルに基づく2次元運動シミュレーションコードが作成できる。		
		13週	常微分方程式に基づく物理シミュレーション		ポテンシャルに基づく2次元運動シミュレーションコードが作成できる。		
		14週	常微分方程式に基づく物理シミュレーション		ポテンシャルに基づく2次元運動シミュレーションコードが作成できる。		
		15週	期末試験				
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	10	0	90	0	0	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	
専門的能力	10	0	90	0	0	100	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	無機化学特論	
科目基礎情報							
科目番号	5596Z04			科目区分	AZ / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：村石治人著「新版 基礎固体化学」三共出版						
担当教員	小西 智也						
到達目標							
1.固体の構造について説明できる。 2.固体の物性について説明できる。 3.固体の反応について説明できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		固体の構造について応用問題を解くことができる。		固体の構造について例題を解くことができる。		固体の構造について説明できない。	
評価項目2		固体の物性について応用問題を解くことができる。		固体の物性について例題を解くことができる。		固体の物性について説明できない。	
評価項目3		固体の反応について応用問題を解くことができる。		固体の反応について例題を解くことができる。		固体の反応について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	本講では主に固体化学の基礎について取り扱う。固体化学では、固体物質を構成するイオンや原子の周期的な配列構造、すなわち結晶構造によって、様々な物性が発現する原理を理解し、そのための合成方法について取り扱う。すなわち、新しい機能性をもつ、無機材料開発には欠かせない学問であると言える。具体的に、結晶構造や欠陥によって発現する様々な物性が、材料としてどのような機能性に繋がるのかを理解する。また、いくつかの無機材料の合成方法についても学習する。						
授業の進め方・方法	ゼミナール形式で行う。また、自学自習も効果的に活用して授業を進める。 【授業時間30時間＋自学自習時間60時間】						
注意点	教科書の各週の授業内容に関連する箇所を事前に読んでおくこと。 シラバス指定参考書：アンソニー・R・ウエスト (著)「ウエスト固体化学 基礎と応用」 講談社						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	結晶構造		結晶の種類と特徴について説明できる。		
		2週	不完全な構造		欠陥をもつ構造と非晶質固体の種類と特徴について説明できる。		
		3週	電子構造		自由電子近似理論とバンド理論について説明できる。		
		4週	電気的性質(1) 導電性		導電体の構造と物性について説明できる。		
		5週	電気的性質(2) 誘電性		誘電体の構造と物性について説明できる。		
		6週	磁気的性質		磁性体の種類と磁気特性について説明できる。		
		7週	光学的性質		固体の光学的性質について説明できる。		
		8週	機械的性質		弾性変形と塑性変形について説明できる。		
	2ndQ	9週	熱的性質		熱伝導率と熱膨張係数について説明できる。		
		10週	ナノ物質とサイズ効果		表面効果・体積効果・量子サイズ効果について説明できる。		
		11週	結晶化反応		核生成成長の過程について説明できる。		
		12週	相転移反応		相平衡と相転移について説明できる。		
		13週	拡散過程と拡散律速反応		カーケンドール効果と拡散係数について説明できる。		
		14週	固相の反応		固体がからむ不均一反応について説明できる。		
		15週	無機固体の合成		様々な無機材料の製造方法について説明できる。		
		16週	【答案返却】				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
		試験		提出物		合計	
総合評価割合		70		30		100	
基礎的能力		35		15		50	
専門的能力		35		15		50	
分野横断的能力		0		0		0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	応用化学実験	
科目基礎情報							
科目番号	5517J01			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	前期:6		
教科書/教材	各担当教員が指定した実験説明書/各担当教員が指定した文献						
担当教員	鄭 涛,杉山 雄樹,上田 康平						
到達目標							
1. 実験目的に応じた基本的な実験技術を習得し、実験を遂行することができる。 2. 実験結果を工学的に考察し、問題解決することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安	
到達目標1	各テーマの基本的な実験技術を修得し、独自の工夫を施すことで実験を効率的に遂行できる。			各テーマの基本的な実験技術を習得し、実験を遂行できる。		各テーマの基本的な実験技術の最低限を修得し、実験を遂行できる。	
到達目標2	実験結果を工学的に考察し、与えられた問題だけでなく、自ら見出した問題も解決できる。			実験結果を工学的に考察し、与えられた問題を理解し、解決できる。		実験結果を工学的に考察し、与えられた問題を何とか解決できる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	「ものづくり」につながる創造的思考力や実践的な問題の発見・解決能力、及び複合的な技術開発を進める能力を養成することを目的とする。						
授業の進め方・方法	テーマ1：無機材料合作製実験（1～7週） テーマ2：有機合成化学実験（8～15週） 【授業時間90時間】						
注意点	1テーマは7～8週間で実施する。実験中は、安全に十分配慮し、担当教員の指示に従うこと。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	テーマ1：無機材料作製実験		(1) ゾルゲル法による粉末試料の作製方法を理解し、英語の実験項を読み実験手順を正確に把握できる。		
		2週	テーマ1：無機材料作製実験		(2) TiO2粉末を作製するにあたり、計量や攪拌、遠心分離ができる。		
		3週	テーマ1：無機材料作製実験		(3) 粉末の焼成ができる。		
		4週	テーマ1：無機材料作製実験		(4) 粉末xrd測定ができる。		
		5週	テーマ1：無機材料作製実験		(5) FE-SEM観察ができる。		
		6週	テーマ1：無機材料作製実験		(6) FT-IR測定ができる。		
		7週	テーマ1：無機材料作製実験		(7) 実験全体を振り返って、全体をレポートにまとめることができる。		
		8週	テーマ2：有機合成化学実験		(8) Diels-Alder反応を理解し、英語の実験項を読み実験手順を正確に把握できる。		
	2ndQ	9週	テーマ2：有機合成化学実験		(9) Diels-Alder反応を行うにあたり、シクロペンタジエンの蒸留ができる。		
		10週	テーマ2：有機合成化学実験		(10) Diels-Alder反応ができる。		
		11週	テーマ2：有機合成化学実験		(11) 付加物の精製ができる。		
		12週	テーマ2：有機合成化学実験		(12) 付加物のNMR解析を行うことができる。		
		13週	テーマ2：有機合成化学実験		(13) 付加物の立体構造について決定できる。		
		14週	テーマ2：有機合成化学実験		(14) 付加物の立体構造およびendo則について、軌道論を用いて説明出来る。		
		15週	テーマ2：有機合成化学実験		(15) 実験全体を振り返って、全体をレポートにまとめることができる。		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	中間・定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	0	0	100	0	0	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	
専門的能力	0	0	80	0	0	80	
分野横断的能力	0	0	20	0	0	20	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	有機合成化学	
科目基礎情報							
科目番号	5517Z02			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	ビギナーのための有機合成反応 新版 (三共出版)						
担当教員	杉山 雄樹						
到達目標							
本講義の到達目標は、有機合成化学の分野で使われる専門用語や知識を修得することのみが目標ではなく、それらを使って学術的、産業的あるいは社会的な意味で議論や会話ができるようになること、さらに、現状の理解と問題点について議論できる力を身につけることも目標である。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安		
到達目標1	電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が予測できる。		電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が7割程度予測できる。		電子的効果、立体的効果により、構造と反応性の関係が5割程度予測できる。		
到達目標2	反応機構に基づき、生成物が予測できる。		反応機構に基づき、生成物が7割程度予測できる。		反応機構に基づき、生成物が5割程度予測できる。		
到達目標3	目的化合物に対して、合成計画をたてることができる。		目的化合物に対して、7割程度合成計画をたてることができる。		目的化合物に対して、5割程度合成計画をたてることができる。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	本科で学んだ有機化学を復習しながら、有機合成化学の基本的な考え方や手法を学修する。医薬品や材料などを合成するためには、多くの合成反応を組み合わせる必要がある。そのことから本講義では、立体効果、電子効果を重点的に置き、基礎的な合成反応から最新の合成反応まで学修し、実際にターゲット化合物に対して合理的な合成反応経路を組み立てられるように知識と問題解決へのデザイン能力を身につける。						
授業の進め方・方法	講義とディスカッション形式で行う。講義毎に課題を与え、その課題をもとにディスカッションを行う。						
注意点							
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	有機合成化学とは		有機反応の分類を説明出来る。		
		2週	有機合成反応の考え方 1		原子、分子軌道、共鳴、酸・塩基について説明できる。		
		3週	有機合成反応の考え方 2		有機反応と電子効果(I効果)について説明出来る。		
		4週	有機合成反応の考え方 3		有機反応と電子効果(R効果)について説明出来る。		
		5週	有機合成反応の考え方 4		有機反応と立体効果について説明出来る。		
		6週	炭化水素の合成と反応 1		水素添加反応, Clemensen還元, Wolf-Kishner還元を説明出来る。		
		7週	炭化水素の合成と反応 2		Wittig反応, Diels-Alder反応を説明出来る。		
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	アルコールの合成と反応		アルコール類の合成法やアルコールの多くの分子変換反応を説明出来る。		
		10週	エーテルとエポキシドの合成と反応		光学活性アルコールの合成, アルコールの保護基について説明できる。		
		11週	カルボニル化合物の合成と反応 1		エーテル, エポキシド類の合成法や, Williamsonエーテル合成, エポキシドの開環反応を説明出来る。		
		12週	カルボニル化合物の合成と反応 2		Grignard反応, Michael付加反応, Aldol反応を説明出来る。		
		13週	アミン及びその誘導体の合成と反応		Baeyer-Viliger酸化, マロン酸エステル合成を説明出来る。		
		14週	芳香族化合物の合成と反応 1		Mannich反応, アミドのHofmann転位を説明出来る。		
		15週	芳香族化合物の合成と反応 2		置換基の配向性から芳香族類の合成戦略を立てることができる。		
		16週	期末試験返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	50	0	0	0	50	100	
基礎的能力	10	0	0	0	10	20	
専門的能力	40	0	0	0	40	80	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	複合材料学
科目基礎情報						
科目番号	5597C04			科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2	
開設期	前期			週時間数	2	
教科書/教材	基礎からわかるFRP（コロナ社）、配布資料（ファイルに保管して授業に持参）					
担当教員	堀井 克章					
到達目標						
1. 各種複合材料に関する知識や技術を理解し、基本事項を説明できる。 2. FRP（繊維強化プラスチック）の定義・用途・材料・成形法・特性・設計法を理解し、基本事項を説明できる。 3. 各種補強材料や混和材料で高性能化・多機能化できるコンクリートに関する知識や技術を理解し、基本事項を説明できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安	
評価項目1	各種複合材料に関する知識や技術を理解し、基本事項の説明、問題提起、提案等ができる。		各種複合材料に関する知識や技術を理解し、基本事項を説明できる。		各種複合材料の基本事項を説明できる。	
評価項目2	FRPの定義・用途・材料・成形法・特性・設計法を理解し、基本事項の説明、問題提起、提案等ができる。		FRPの定義・用途・材料・成形法・特性・設計法を理解し、基本事項を説明できる。		FRPの定義・用途・材料・成形法・特性・設計法の基本事項を説明できる。	
評価項目3	各種補強材料や混和材料で高性能化・多機能化できるコンクリートの知識や技術を理解し、基本事項の説明、問題提起、提案等ができる。		各種補強材料や混和材料で高性能化・多機能化できるコンクリートの知識や技術を理解し、基本事項を説明できる。		各種補強材料や混和材料で高性能化・多機能化できるコンクリートの基本事項を説明できる。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	本科目は、構造材や機能材として利用されている金属・有機・無機系各種複合材料、複合材料の中でも適用分野の広いFRP、各種材料を複合化することで高性能・多機能化できるコンクリートなどを取り上げ、使用材料・成形法・特性・設計法・用途などに関する知識や技術を習得し、社会や環境に配慮した設計・施工・維持管理等に関連する技術力を高めるものである。					
授業の進め方・方法	【授業時間31時間＋期末試験＋自学自習時間60時間】					
注意点	本科目は、創造技術システム工学におけるJABEE修了要件の専門分野V群に属し、教科書、配布資料、ビデオ等を使う講義のため、欠席しないよう心がけること。建設材料として世界で最も多用されるコンクリートは古典的および先端的な複合材料であり、これを扱う授業では、本科建設コースの「材料学1」、「材料学2」、「コンクリート構造学」等の教科書や参考書を使い、各自が事前に基本事項を理解して授業に臨むこと。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ガイダンス 各種複合材料	授業の目標・意義・計画、諸注意等を理解して説明ができる。 複合材料の種類、使用材料、成形法、特性、設計法、用途等を説明できる。		
		2週	各種複合材料	複合材料の種類、使用材料、成形法、特性、設計法、用途等を説明できる。		
		3週	各種複合材料	複合材料の種類、使用材料、成形法、特性、設計法、用途等を説明できる。		
		4週	各種複合材料	複合材料の種類、使用材料、成形法、特性、設計法、用途等を説明できる。		
		5週	各種複合材料	複合材料の種類、使用材料、成形法、特性、設計法、用途等を説明できる。		
		6週	FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
		7週	FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
		8週	FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
	2ndQ	9週	中間試験			
		10週	答案返却 FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
		11週	FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
		12週	FRP	FRPの定義、用途、材料、成形法、特性、設計法等を等を説明できる。		
		13週	高性能・多機能型コンクリート	コンクリートの各種補強材・混和材料の種類、特性、利用法等を説明でき、これらを複合化させた高性能・多機能型コンクリートの特徴や用途が説明できる。		
		14週	高性能・多機能型コンクリート	コンクリートの各種補強材・混和材料の種類、特性、利用法等を説明でき、これらを複合化させた高性能・多機能型コンクリートの特徴や用途が説明できる。		

		15週	高性能・多機能型コンクリート			コンクリートの各種補強材・混和材料の種類、特性、利用法等を説明でき、これらを複合化させた高性能・多機能型コンクリートの特徴や用途が説明できる。	
		16週	(期末試験) 答案返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	0	40	0	100
基礎的能力	10	0	0	0	10	0	20
専門的能力	30	0	0	0	20	0	50
分野横断的能力	20	0	0	0	10	0	30

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	環境生物工学	
科目基礎情報							
科目番号	5597C06			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	微生物学・青木健次・化学同人						
担当教員	大田 直友						
到達目標							
1.微生物の分類、細胞構造、代謝、遺伝を説明できる。 2.微生物に関する研究の歴史、取り扱い、遺伝子工学、応用を説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	1.微生物の分類、細胞構造、代謝、遺伝を詳細に説明できる。			1.微生物の分類、細胞構造、代謝、遺伝を説明できる。		1.微生物の分類、細胞構造、代謝、遺伝を説明できない。	
到達目標2	2.微生物に関する研究の歴史、取り扱い、遺伝子工学、応用を詳細に説明できる。			2.微生物に関する研究の歴史、取り扱い、遺伝子工学、応用を説明できる。		2.微生物に関する研究の歴史、取り扱い、遺伝子工学、応用を説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	身近に存在する微生物は、我々の生活に深く関わっている。微生物の生物学的側面（分類、細胞構造、代謝、遺伝）と応用的側面を学び、包括的な理解をめざす。						
授業の進め方・方法	予習の確認小テスト、学生による発表で授業を進める【授業時間30時間＋自学自習時間60時間】						
注意点							
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
前期	1stQ	週	授業内容		週ごとの到達目標		
		1週	微生物学の歴史		微生物学の歴史を説明できる		
		2週	微生物の取り扱い方		微生物の取り扱い方を説明できる		
		3週	微生物の種類と分類		微生物の種類と分類を説明できる		
		4週	微生物の種類と分類		微生物の種類と分類を説明できる		
		5週	微生物の細胞構造		微生物の細胞構造を説明できる		
		6週	微生物の栄養と増殖		微生物の栄養と増殖を説明できる		
		7週	微生物の遺伝と遺伝子工学		微生物の遺伝と遺伝子工学を説明できる		
	8週	微生物の遺伝と遺伝子工学		微生物の遺伝と遺伝子工学を説明できる			
	2ndQ	9週	中間試験				
		10週	微生物の代謝		微生物の代謝を説明できる		
		11週	微生物の代謝		微生物の代謝を説明できる		
		12週	微生物の応用		微生物の応用を説明できる		
		13週	微生物の応用		微生物の応用を説明できる		
		14週	微生物の生態と地球化学的物質循環への寄与		微生物の生態と地球化学的物質循環への寄与を説明できる		
		15週	微生物と環境保全		微生物と環境保全を説明できる		
		16週	期末試験返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	0	50	0	50	0	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	
専門的能力	0	50	0	50	0	100	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	電気情報数学	
科目基礎情報							
科目番号	5597E02			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	演習と応用 微分方程式（サイエンス社）						
担当教員	杉野 隆三郎						
到達目標							
1.フーリエ級数とフーリエ変換を理解し、その基礎的な計算ができる。 2.ラプラス変換と演算子法を理解し、その基礎的な計算ができる。 3.微分方程式の解の構成法を理解し、その基礎的な計算ができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	フーリエ級数とフーリエ変換を理解し、その基礎的な計算ができ、応用できる。			フーリエ級数とフーリエ変換を理解し、その基礎的な計算ができる。		フーリエ級数とフーリエ変換を理解し、その最低限の計算ができる。	
評価項目2	ラプラス変換と演算子法を理解し、その基礎的な計算ができ、応用できる。			ラプラス変換と演算子法を理解し、その基礎的な計算ができる。		ラプラス変換と演算子法を理解し、その最低限の計算ができる。	
評価項目3	微分方程式の解の構成法を理解し、その基礎的な計算ができ、応用できる。			微分方程式の解の構成法を理解し、その基礎的な計算ができる。		微分方程式の解の構成法を理解し、その最低限の計算ができる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	これまで学んだ線形代数と解析学を基礎に、常微分方程式と偏微分方程式の解の構成法、フーリエ変換、ラプラス変換に関する基本的な考え方を講義し、初等的な関数空間を理解する。さらに、電気工学と情報工学の具体的な問題にこれらの数学的解法をどのように適用するかを講義し、電気電子情報システムに対する演算子法の基礎的計算技術を習得する。						
授業の進め方・方法							
注意点	専攻科で学んだ数学（線形代数学、解析学）を復習すること。テキストを予習し、集中した授業を成立させること。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	フーリエ解析		フーリエ級数を理解し、その基礎計算ができる。		
		2週	フーリエ解析		フーリエ級数の応用を理解し、その基礎的な計算ができる。		
		3週	フーリエ解析		フーリエ変換を理解し、その基礎計算ができる。		
		4週	ラプラス変換		ラプラス変換を理解し、その基礎的な計算ができる。		
		5週	ラプラス変換		ラプラス変換の応用を理解し、その基礎的な計算ができる。		
		6週	ラプラス変換		演算子法を理解し、その基礎的な計算ができる。		
		7週	周波数スペクトル		フーリエ級数と周波数解析の関係を理解し、説明できる。		
		8週	周波数スペクトル		フーリエ級数と周波数解析の関係をを用いた、その基礎的な応用計算ができる。		
	2ndQ	9週	周波数スペクトル		フーリエ変換と周波数解析の関係を理解し、その基礎的な応用計算ができる。		
		10週	微分方程式と関数空間		フーリエ解析と微分方程式の解の構成を理解し、関数空間が説明できる。		
		11週	微分方程式と関数空間		微分方程式の位相空間における解挙動を理解し、その基礎的な応用計算ができる。		
		12週	常微分方程式の求解		常微分方程式の解の構成について理解し、説明できる。		
		13週	常微分方程式の求解		常微分方程式の解の構成法を用いて、その基礎的な応用計算ができる。		
		14週	偏微分方程式の求解		偏微分方程式の解の構成について理解し、説明できる。		
		15週	偏微分方程式の求解		偏微分方程式の解の構成法を用いて、その基礎的な応用計算ができる。		
		16週	答案返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	80	0	180
基礎的能力	60	0	0	0	40	0	100

專門的能力	30	0	0	0	30	0	60
分野横断的能力	10	0	0	0	10	0	20

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	半導体物性
科目基礎情報						
科目番号	5597E04			科目区分	専門 / 選択	
授業形態				単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2	
開設期	後期			週時間数	2	
教科書/教材	電子物性 松澤・高橋・斉藤 共著（森北出版）					
担当教員	長谷川 竜生					
到達目標						
1. 固体のバンド構造について説明できる。 2. 半導体中のキャリア密度の温度変化について説明できる。 3. 3種類の電気分極の機構について説明できる。 4. 磁性の発現機構について説明できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベル(優)		標準的な到達レベル(良)		最低限の到達レベル(可)	
到達目標1	固体のバンド構造について説明でき、ブロッホの定理を用いてその電子状態を記述することができる。		固体のバンド構造を、周期ポテンシャルと関連付けて説明できる。		固体のバンド構造に関する考え方を理解することができる。	
到達目標2	真性半導体と不純物半導体のキャリア密度の温度変化について、フェルミ分布関数を用いて説明できる。		真性半導体と不純物半導体のキャリア密度の温度変化について、定性的な説明をすることができる。		半導体中のキャリアに関する考え方を理解することができる。	
到達目標3	3種類の電気分極の機構について、定量的な説明をすることができる。		3種類の電気分極の機構について、定性的な説明をすることができる。		電気分極に関する考え方を理解することができる。	
到達目標4	原子の磁気モーメントや伝導電子を考慮して、磁性の発現機構について定量的に説明できる。		磁性の発現機構について、定性的な説明をすることができる。		磁性に関する考え方を理解することができる。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	身の回りの様々な物質、また製造業で使われる材料が示す物理的・化学的な諸物性のほとんどは、物質中の電子の振る舞いに起因したものである。本講義は量子力学を出発点として、最も基本的な性質について述べていき、将来のより発展した学修のための基礎を身に付けることを目的としている。なお、この科目は企業で半導体の要素技術の開発を担当していた教員が、その経験を活かし、様々な物質の特性について講義形式で授業を行うものである。					
授業の進め方・方法	講義形式で授業を行っていく。内容としては、先ず量子力学の基礎的な事柄を学んだ後、エネルギーバンド構造と半導体を学び、その後誘電体、磁性体へと進んでいく。この科目は学修単位科目のため、事前事後学習としてレポート等を実施します 【授業時間 3 0 時間 + 自学自習時間 6 0 時間】					
注意点	本講義を履修するためには、微分方程式や線形代数に関する知識が不可欠です。また、内容が多いため、講義中に演習問題を解く時間が無く、演習は課題として提出してもらいます。内容の理解のために、課題は他の多くの書物を参照して、自分で解決してください。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	物質の粒子性と波動性、不確定性原理		物質の粒子性と波動性、及び不確定性原理について説明できる。	
		2週	井戸型ポテンシャルの波動関数		1次元井戸型ポテンシャルにおけるシュレーディンガー方程式の解を求めることができる。	
		3週	トンネル効果		1次元系において、矩形のポテンシャル障壁におけるトンネル確率を求めることができる。	
		4週	水素原子のエネルギー準位		クーロンポテンシャルにおけるシュレーディンガー方程式の解が、3つの量子数で表されることを理解できる。	
		5週	金属の自由電子論		変数分離法により、3次元系の自由電子の波動関数、及び状態密度を求めることができる。	
		6週	フェルミ・ディラック分布関数		フェルミ・ディラック分布関数について説明できる。	
		7週	金属の電子密度分布とフェルミレベル		電子密度とフェルミレベル、フェルミ波数、フェルミ温度との関係を導くことができる。	
		8週	中間試験			
	4thQ	9週	周期ポテンシャルにおけるエネルギー分散		クローニッヒ・ペニーのモデルにおけるエネルギー分散の様子について理解できる。	
		10週	結晶内における電子の運動とバンド理論		効質量、及びバンド理論の考え方について理解できる。	
		11週	真性半導体		電子密度・正孔密度の温度依存性を導出できる。	
		12週	不純物半導体		n型・p型半導体の特徴について説明できる。	
		13週	誘電体		電子分極、イオン分極、配向分極について理解できる。	
		14週	原子の磁気モーメント		軌道磁気モーメントとスピン磁気モーメントについて説明できる。	

		15週	磁性体の分類		常磁性、反磁性、強磁性、反強磁性の特徴について理解できる。		
		16週	期末試験返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験		小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計
総合評価割合		60	0	40	0	0	100
基礎的能力		20	0	10	0	0	30
専門的能力		40	0	30	0	0	70
分野横断的能力		0	0	0	0	0	0

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	電子計測工学	
科目基礎情報							
科目番号	5597E05			科目区分	専門 / 選択		
授業形態				単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	新版 電気・電子計測入門(実教出版)/電子計測 基礎と応用(培風館)						
担当教員	松本 高志						
到達目標							
1.測定データの統計的取り扱いを理解し、説明できる。 2.デジタル量の扱いを理解し、AD変換、DA変換を説明できる。 3.様々な電気量の測定方法と各種計測器の計測原理を説明できる。 4.計測システムについて説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安	
測定データの統計的取り扱いを理解し、説明できる。	測定データの統計的取り扱いを理解し、すべて説明できる。			測定データの統計的取り扱いを理解し、概要を説明できる。		測定データの統計的取り扱いを理解できる。	
デジタル量の扱いを理解し、AD変換、DA変換を説明できる。	デジタル量の扱いを理解し、AD変換、DA変換、デジタル量の伝送を説明できる。			デジタル量の扱いを理解し、AD変換、DA変換の概要を説明できる。		デジタル量の扱い、AD変換、DA変換を理解できる。	
様々な電気量の測定方法と各種計測器の計測原理を説明できる。	様々な電気量の測定方法と各種計測器の計測原理をすべて説明できる。			様々な電気量の測定方法と各種計測器の計測原理について概要を説明できる。		様々な電気量の測定方法と各種計測器の計測原理を理解できる。	
計測システムについて説明できる。	複数の計測システムの仕組みを説明できる。			計測システムの仕組みについて概要を説明できる。		計測システムについて理解できる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	計測分野でもデジタル化が著しく、測定器はコンピュータとともに用いられ、測定データをコンピュータに取り込んで解析することが一般的である。本講義では、計測の基礎から電子計測システムの手法までを習得することを目的とする。 この科目は、企業で電気計装設備の導入・管理を担当していた教員が、その経験を活かし、電子計測の基礎、様々な電気量の測定と計測器、計測システムについて講義形式で授業を行うものである。						
授業の進め方・方法	・座学形式で授業を進めるが、ペアやグループでの学び合いも行う。 ・この科目は学修単位のため、事前・事後学習としてレポートを実施する。						
注意点	予習を十分に行い問題意識を持って授業に臨むとともに、授業後は速やかに自学自習課題に取り組み、理解を深めて欲しい。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	電子計測の基礎		(1)各種測定方式について説明できる。		
		2週	電子計測の基礎		(2)測定誤差について説明できる。		
		3週	電子計測の基礎		(3)測定データの統計的取り扱いを説明できる。		
		4週	デジタル量の扱い		(1)2進法と10進法を説明できる。		
		5週	デジタル量の扱い		(2)アナログ・デジタル変換を説明できる。		
		6週	デジタル量の扱い		(3)デジタル・アナログ変換を説明できる。		
		7週	デジタル量の扱い		(4)デジタル量の伝送を説明できる。		
		8週	中間試験				
	4thQ	9週	様々な電気量の測定と計測器		(1)電圧・電流の測定とデジタルマルチメータについて説明できる。		
		10週	様々な電気量の測定と計測器		(2)電力の測定について説明できる。		
		11週	様々な電気量の測定と計測器		(3)抵抗・インピーダンスの測定とネットワークアナライザについて説明できる。		
		12週	様々な電気量の測定と計測器		(4)周波数と位相の測定について説明できる。		
		13週	計測システム		(1)各種センサーの仕組みを説明できる。		
		14週	計測システム		(2)各種計測システムについて説明できる。		
		15週	計測システム		(3)オシロスコープ、ロジックアナライザ、スペクトラムアナライザについて説明できる。		
		16週	期末試験 答案返却				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	30	0	100
基礎的能力	10	0	0	0	0	0	10
専門的能力	60	0	0	0	30	0	90

分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0
---------	---	---	---	---	---	---	---

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	信号処理工学	
科目基礎情報							
科目番号	5597I03			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	信号処理入門（オーム社）						
担当教員	安野 恵実子						
到達目標							
1. アナログ信号とデジタル信号について、基本的事項を理解し、説明できる。 2. 相関関数の定義を理解し、簡単な計算ができる。 3. フーリエ級数展開の基本事項を理解し、基本的な関数のフーリエ級数展開ができる。 4. フーリエ変換の定義を理解し、説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		最低限の到達レベルの目安(可)	
到達目標1	アナログ信号とデジタル信号について説明でき、実際の問題に適用できる。			アナログ信号とデジタル信号について、説明できる。		アナログ信号とデジタル信号について、基本的事項を理解し、説明できる。	
到達目標2	相関関数の定義を理解し、簡単な計算ができ、課題解決に応用できる。			相関関数の定義を理解し、計算ができる。		相関関数の定義を理解し、簡単な計算ができる。	
到達目標3	フーリエ級数展開を理解し、フーリエ級数展開ができる。			フーリエ級数展開の理解し、基本的な関数のフーリエ級数展開ができる。		フーリエ級数展開の基本事項を理解し、基本的な関数のフーリエ級数展開ができる。	
到達目標4	フーリエ変換の定義を理解し、課題解決に応用できる。			フーリエ変換の定義を理解し、説明できる。		フーリエ変換の定義を説明できる。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	自然現象には不規則に変動するものがきわめて多い。本講義では、そこに埋もれている信号の性質を解析したり、抽出処理するための基礎的信号処理技法を修得することを目標とする。						
授業の進め方・方法	授業は講義形式で行います。授業を受ける際には、予習と復習をしたうえで授業に臨むと理解が深まります。 【授業時間31時間＋自学自習時間60時間】 この科目は学修単位科目のため、事前・事後学修としてレポート等を実施します。						
注意点	単に講義を受講するだけでなく、レポート等の演習にも積極的に取り組んでください。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	信号処理とは ・信号の種類 ・アナログ信号とデジタル信号 ・サンプリング問題		アナログ信号とデジタル信号について説明できる。		
		2週	信号処理の例 ・波形の平滑化 ・雑音の圧縮		波形の平滑化、雑音の圧縮について説明できる。		
		3週	数学の準備体操 ・信号の表現		正規直交基について正しく理解し、計算によって値を求めることができる。		
		4週	・多次元ベクトル空間から関数空間へ		多次元ベクトル空間から関数空間への拡張について理解できる。		
		5週	・正規直交関数系		正規直交関数形について正しく理解し、計算によって値を求めることができる。		
		6週	相関関数 ・正規直交関数系関数の類似性 ・相互相関関数		相互相関関数について正しく理解し、計算によって値を求めることができる。		
		7週	・自己相関関数		自己相関関数について正しく理解し、計算によって値を求めることができる。		
		8週	演習		演習問題を解くことができる。		
	2ndQ	9週	中間試験				
		10週	フーリエ級数展開 ・フーリエ級数展開とは		フーリエ級数展開について理解し、与えられた式を展開することができる。		
		11週	・偶関数と奇関数 ・周期が2πでない場合		偶関数と奇関数について説明できる。		
		12週	・複素フーリエ級数展開を導く		複素フーリエ級数展開を導くことができる。		
		13週	・フーリエ級数展開の実例 ・パーシバルの定理		フーリエ級数展開の実例について理解し、説明と計算ができる。		
		14週	・フーリエ級数展開の重要な性質		フーリエ級数展開の重要な性質について理解し、説明できる。		
		15週	フーリエ変換 ・フーリエ級数展開からフーリエ変換へ ・フーリエ変換の性質		フーリエ変換の性質について理解し、説明できる。		
		16週	答案返却				

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	定期試験	小テスト	ポートフォリオ	発表・取り組み姿勢	その他	合計	
総合評価割合	70	0	30	0	0	100	
基礎的能力	30	0	15	0	0	45	
専門的能力	40	0	15	0	0	55	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	

阿南工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	無機化学特論	
科目基礎情報							
科目番号	5597Z04			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	応用化学コース			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：村石治人著「新版 基礎固体化学」三共出版						
担当教員	小西 智也						
到達目標							
1.固体の構造について説明できる。 2.固体の物性について説明できる。 3.固体の反応について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	固体の構造について応用問題を解くことができる。			固体の構造について例題を解くことができる。		固体の構造について説明できない。	
評価項目2	固体の物性について応用問題を解くことができる。			固体の物性について例題を解くことができる。		固体の物性について説明できない。	
評価項目3	固体の反応について応用問題を解くことができる。			固体の反応について例題を解くことができる。		固体の反応について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	本講では主に固体化学の基礎について取り扱う。固体化学では、固体物質を構成するイオンや原子の周期的な配列構造、すなわち結晶構造によって、様々な物性が発現する原理を理解し、そのための合成方法について取り扱う。すなわち、新しい機能性をもつ、無機材料開発には欠かせない学問であると言える。具体的に、結晶構造や欠陥によって発現する様々な物性が、材料としてどのような機能性に繋がるのかを理解する。また、いくつかの無機材料の合成方法についても学習する。						
授業の進め方・方法	ゼミナール形式で行う。また、自学自習も効果的に活用して授業を進める。 【授業時間30時間+自学自習時間60時間】						
注意点	教科書の各週の授業内容に関連する箇所を事前に読んでおくこと。 シラバス指定参考書：アンソニー・R・ウエスト (著)「ウエスト固体化学 基礎と応用」 講談社						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	結晶構造		結晶の種類と特徴について説明できる。		
		2週	不完全な構造		欠陥をもつ構造と非晶質固体の種類と特徴について説明できる。		
		3週	電子構造		自由電子近似理論とバンド理論について説明できる。		
		4週	電気的性質(1) 導電性		導電体の構造と物性について説明できる。		
		5週	電気的性質(2) 誘電性		誘電体の構造と物性について説明できる。		
		6週	磁気的性質		磁性体の種類と磁気特性について説明できる。		
		7週	光学的性質		固体の光学的性質について説明できる。		
		8週	機械的性質		弾性変形と塑性変形について説明できる。		
	2ndQ	9週	熱的性質		熱伝導率と熱膨張係数について説明できる。		
		10週	ナノ物質とサイズ効果		表面効果・体積効果・量子サイズ効果について説明できる。		
		11週	結晶化反応		核生成成長の過程について説明できる。		
		12週	相転移反応		相平衡と相転移について説明できる。		
		13週	拡散過程と拡散律速反応		カーケンドール効果と拡散係数について説明できる。		
		14週	固相の反応		固体がからむ不均一反応について説明できる。		
		15週	無機固体の合成		様々な無機材料の製造方法について説明できる。		
		16週	【答案返却】				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験		提出物		合計		
総合評価割合	70		30		100		
基礎的能力	35		15		50		
専門的能力	35		15		50		
分野横断的能力	0		0		0		